

若手記者の自由研究

気になるテーマや話題を若手記者が深掘りする硬軟多彩なリポート「若手記者の自由研究」を随時掲載します。

京の涼音巡り

湯沢 宏志記者(37)＝報道部(大学担当)



連日35度を超える真夏日が続く。通勤で歩くわずかな時間で額や腕には拭えども拭えども汗が噴き出す。せめて気持ちだけでも涼やかになれないだろうか。

目を閉じて 耳を澄ませば 心に涼風

「涼やかになれる音は周囲にあふれている」。身の回りの音「環境音」を長年研究する京都橋大の小松正史教授は、生活の中で少し注意を払えば新たな音との出会いがあると説明する。

専門家が勧める「涼音」を訪ねて向かったのは、平安神宮(京都市左京区)。七夕風鈴まつりが開かれていた。庭園を歩くと遠くから「チリン、チリン」とかわいらしい音が聞こえてきた。橋殿に近づくガラス製の落ち着いた音に加え、金属製の「リン、リン」という高音が混じっていることに気付いた。風が吹く度重奏が響いた。

日本の庭園には四季を問わずに聞こえる涼音もある。詩仙堂(同区)に踏み入ると、庭園に「カイン」としおどしの乾いた音が鳴った。50秒ほどの間隔をおいて響く鼓のような音が静寂を引き立て、心が落ち着く。

チリンチリン

カーン

ザザー

サワサワ

シャッシャッ

バン

揺らぎ、軽やかな音 心地よく



カーンと軽妙な音を庭園内に響かせるししおどし(京都市左京区・詩仙堂)



樹木が風に合わせてこすれ音を響かせる(京都市上京区・京都御苑)



不規則なリズムで水がたたたりかめの中で不思議な音色を奏でる水琴窟(京都市中京区・高松神明神社)

イミングで手を加える。釜の中を金平糖が落ちる度に響く「ザザー」という音を小松さんは波音に例えた。小松さんが務める京都橋大(山科区)には学生が生み出す涼やかさを感じさせる音があるという。学内の和室に向かうと女子学生が一人静かにすずりに向かっていた。シャッ、シャッ」と小気味いい音が室内に響く。軽

やかな筆遣いに合わせて、紙との摩擦で起こるかすかな音のリズムが心地よい。

強い日が差し込む弓道場では、学生らが集中力を高めて的を狙う。矢が放たれた瞬間の鋭い風切り音と、的を貫く瞬間の「バン」という衝撃音が一定の間隔で続く。引き締まった空気に暑さが和らいだ。

環境音で気分が変わる理由を小松さんは「音が経験や想像に結びつき感覚に作用する。揺らぎやほどよい変化があり、明

環境音を意識、五感全体の感度高まる

立ち上ってくる。

耳で普段の生活空間を観察するようになると、音の面白さや魅力だけでなく、視覚や肌感覚など五感全体への興味・感度が高まる。

普段聞き流してしまっている音を聞けるようになる方法として、決まった時間に同じ場所で、1分間意識して遠くの音に耳を澄ませる「耳トレ」があ

る。

耳を傾けるスイッチを入れることで、聞き流している音の中から自身にとって心地よい音や、季節の移ろいを表す繊細な音を捉えられるようになるはずだ。猛暑は変えられなくても、音で感じる心地よさは自分で見つけられる。耳を澄まして、自分だけの「涼しい音」のコレクションをつくってほしい。

記事で紹介した音が聞けます



QRコードを読み取り特集ページにアクセスするとより詳しい記事を読むことができます。
(閲覧には会員登録が必要です)



波打ち際のようなリズムカールな音を奏でる金平糖(京都市左京区・緑寿庵清水)



鋭い発射音を響かせて的を狙う弓道部員たち(京都市山科区・京都橋大)



筆の流れに合わせて紙と摩擦音が心地よい



環境専門家として長年京都の音を集めている小松教授

小松正史

京都橋大教授に聞く

日常生活にあふれる環境音について、楽しみ方や見つけ方のコツを小松正史・京都橋大教授に聞いた。(聞き手・湯沢宏志)

生活の中で、全ての音を意識し続けると疲れてしまうため、普段は環境音の多くを聞き逃している。ただ、いつもより少し注意を向ければ、周囲の音が芸術作品のような力強さを持って